

旧制水戸高・梅本克己・ハンガリー事件

— 大池文雄氏に聞く —

今 西 一

はじめに

大池氏との出会いは、氏が私に手紙を添えた著書『水戸コミュニストの系譜』（ぺりかん社、2009年、以下、著Aと略）を、立命館大学の言語文化研究所経由で、送ってくださったことから始まる。その手紙の内容は、インタビューでも触れている、同研究所の紀要に載った、いいだもも氏の論文（「ホメロースの『イリアス』『オデュセイ』の一時代の後を承けて」『立命館大学の言語文化研究所』第21巻1号、2009年）が、いかにデタラメなものであるかを、詳細に批判されたものであった。その内容は、西川長夫氏によって、同紀要の第22巻2号（2010年）に掲載されている（91～93頁）。

正直、1928年生まれというお年と、その手紙の明晰な文章には驚かされ、御著書の面白さに圧倒された。その内容は、私たちが調べていた、1951年2月に起こった、日本共産党東京大学細胞の国際派のなかでのリンチ事件に対する深い洞察や、ご自身が体験された戦後の茨城での党活動、出版業界での秘話など、実に興味深いものであった。大池氏の名前は、小島亮氏の労作『ハンガリー事件と日本』（中公新書、1987年、現代思潮新社、2003年復刊）で、最も的確にハンガリー事件（今日では「ハンガリー革命」とすべきであろうが、当時の歴史的用語を使っておく）の歴史的评价を行った人物として、その名前だけは知っていた。

早速、お手紙を出すと、事業を引退されて静岡県の沼津市に住んでおられたが、東京に出てきて会ってもよい、というお返事を電子メールでいただいた。

これもショックで、私は何とはなしに自分の手紙の末尾に、習慣としてメールアドレスを書いていたが、まさか80歳を過ぎた人から、メールで返事がくるとは思っていなかった。しかし、あの見事なワープロで打たれた長文の手紙からすれば、メールを使えないと考えていたのは、私の不明だったと恥じいった。

それも待ち合わせの場所は、東京の地下鉄本郷三丁目駅前の喫茶店「麦」なのである。ここは、17、8年前、私が東大の史料編纂所に「内地研修」として通っていた時に、ほとんど毎日のように使っていた思い出深い喫茶店であった。そして2010年6月18日の午後、「麦」でお会いした大池氏は、茨城時代からの盟友で、出版社風濤社の元社長高橋行雄氏と一緒に来られた。初めて会った大池氏は、目つきは鋭いが、瀟洒な紳士であった。話し方も静かで、大病をされたせいもあってか、押し殺したような声を出されていたが、これは昔からのようであった。元活動家に見られるような、まくし立ててアジェンション（煽動）をするタイプではなかった。

高橋氏は、大池氏の著書によると、「水戸市常磐小学校を全甲の好成績で出て、その内申書を持って旧制県立土浦中学の入試口頭試問を受けた（略）。父親の転勤で一家が土浦市真鍋に引っ越したのである。ところが不合格だった。信じられない思いだったが抗議は受け付けられなかった。これは徳川時代、水戸藩がいかにも隣藩に対して威張っていたか、その「仕返し」を受けたと言われていたそうである。かつてソ連の核実験を支持するいいだもも氏と、「原爆論争」を「高橋が仕掛けて、満座の中で、いいだ氏にコテンパンにやっつけられた」そうで、「この種のルサンチマン的記憶に関しては私はどうも高橋の敵ではない」と、大池氏に言わせる人物であった（著A、39～40、134頁）。確かに高橋氏は、いいだ氏が嫌いであった。氏はかつて「吉田和夫」のペンネームで、大池氏とともに『批評』という同人雑誌を出していた。

その後、やはりその『批評』のグループであった救仁郷建氏が創業し、大池氏が現在も役員をしている、ペリかん社の会議室で、3時間以上のロング・インタビューを行い、夕食をご馳走になって、夜の本郷の喫茶店でもお話を伺った。終始、ジェントルマンであったが、お孫さんの大学進学の話をする時は、

本当に楽しそうであった。本インタビューもまた、北海道情報大学講師の天野尚樹氏に原稿を起こしてもらい、その修正を手伝ってもらったが、天野氏もまた、大池氏の記憶力と文章構成力には驚嘆していた。

1. 梅本克己氏の「主体性」論の後継者

大池氏は、旧制水戸高校で、哲学者の梅本克己氏と出会っている。自称梅本氏の「一番弟子」である。梅本氏は、その独自の「主体性」論とともに、旧制の水戸高が茨城大学になる時、教授への昇任を拒否され、追放された戦後のレッドパージの犠牲者としても有名であった。私の自殺した大学時代の友人の一人も、梅本哲学の熱烈な信奉者であった。その事件の顛末を聞いてみたいというのが最初の関心であったが、梅本克己追悼文集刊行会編『追悼 梅本克己』（風濤社、1975年）や、克己会回想文集編集委員会編『回想 梅本克己』（こぶし書房、2001年）にも載っていないエピソードを聞くことができた。

確かに、旧制水戸高の「バンカラ精神」と「野人」梅本氏はマッチするが、例えば病気で倒れたとは言え、立命館大学教授として京都に住むのには、無理があったと思う。しかし、お話を聞いて、改めて大池氏の『奴隷の死』（ペリカン社、1988年、以下、著Bと略）を読み返して見ると、大池氏には、梅本氏の「主体的唯物論」の精神が、その政治的立場は異なっても、脈々と流れていることがわかる。ひるまず、どこでも自分が正しいと思ったことを主張する態度も、そのひとつである。

また1948年から始まる、社会党と共産党との合同運動（「社共合同」）や、茨城県の常東農民運動の「反独占」闘争などは、歴史学のなかで高い評価を受けてきたものであるが、これに対してもその実践者の一人として、大池氏はかなり厳しい評価を与えている。これは、現在の氏の立場（「現実的保守主義」と語っていた）が言わせるのではなく、同時代の論攷を集めた『奴隷の死』を読んでみれば、一貫した主張であることがわかる。

2. ハンガリー事件とは

ハンガリー事件と言っても、今の若い人たちには、よくはわからないことであろうから、簡単に説明をする。1956年2月24日、ソ連共産党の第20回大会で、フルシチョフによる亡きスターリンへの批判が行なわれる。東欧の民衆は、この「スターリン批判」に期待し、まずポーランドでは、56年6月28日、ポズナニ市のジスポ工場で発生したストライキが、市民と治安当局との戦闘にまで発展し、多数の死傷者をだした（「ポズナニ事件」）。

しかし、ハンガリーのような内戦にならなかったのは、ポーランドでは、この事件の後、〈プラヴィ・グループ〉という党内改革派が台頭し、党内民族派と連合して、〈ナトリーン・グループ〉と呼ばれていた党内スターリン派を圧倒し、56年10月19日、ソ連の干渉をはねのけて、長く獄中にいたゴムルカを、党第一書記に復帰させたからである（ポーランド10月政変）。

これに対してハンガリーでは、第二次大戦中ナチス・ドイツ側についたという事で、戦後ソ連から法外な賠償金をかけられ、さらに「合弁会社」という植民地的な企業形態によってソ連に収奪されていた。1950年代には、さまざまな抗議運動が起こるが、東欧一凶暴な「小スターリン」と言われたラーコシ・マーチャーシュによって弾圧されてきた。

ソ連のミコヤンは、「ポズナニ事件」の直後、ラーコシを解任させるが、その後任がやはりスターリニストのゲレであることに、民衆の怒りは爆発した。10月23日、ポーランドの政変に連帯して集まった民衆は、スターリンの銅像を引き倒し、放送局を占拠した。翌24日、ハンガリー労働党（共産党）は、ソ連軍介入の要請を発表した。これが「第1次介入」であるが、歩兵を伴わない戦車のみでの単独行動で威嚇を目的としていたと思われる。

ところが民衆は、ゲリラ戦術で応戦し、労働者党員は「労働者評議会」をつくって、工場の自主管理が行われた。ハンガリーは、「コミューン」状態に入り、27日には民族戦線政府が結成されて、一党独裁は崩壊した。しかし、10月31日、英仏軍が、エジプトを攻撃する「スエズ動乱」が始まると、ハンガリーは一瞬、

世界史の「エア・ポケット」になった。

ハンガリーでは、民衆から「ワルシャワ条約機構からの脱退」の声も上がって、11月4日、ソ連軍のブタペスト進撃が始まる。いわゆる「第2次介入」である。戦車および機械化師団12、戦車2500台、装甲車1000台、さらに歩兵15万人をとまなう大部隊であった。ソ連軍は無差別破壊を行い、捕虜は射殺するかシベリア送りになった。戦闘は、11月10日まで続き、ハンガリー側の死者は約1万7000人、ソ連側も1900人の死者をだした。西側への亡命者は20万人を超えたと言われている。

このハンガリー事件に対して、日本の論壇・知識人は、ほとんどまともな対応ができなかった。政党では、社会党の右派が「ソ連の暴挙」を批判するのに対して、左派はソ連擁護にまわった。特にひどいのは、大内兵衛・山川均・上原専禄氏らの座談会で（「歴史のなかで」『世界』1957年4月号）、大内氏はハンガリーを「デモクラシーが発達している国ではない。元来は百姓国ですからね」と決めつけ、上原氏もハンガリー人を「神経質」な国民だとけなし、山川氏は、蜂起には「労働者はそれほどいない」と断じている。日本の知識人の進歩主義、西洋崇拜と東欧蔑視には度し難いものがある。共産党はもちろん、宮本顕治氏らによるハンガリー事件＝「反革命」説である。

これに対して興味深いのは、自民党の中曽根康弘氏や芦田均氏らの動きである。中曽根氏は事件から半年後にハンガリーを直接訪問しており、芦田氏は社会党右派の西尾末広氏らと日本ハンガリー救援会を組織している。救援会は、精力的に日本各地で募金運動・後援会を展開している、一時は、ハンガリーの亡命者を、北海道で受け入れようという案さえ上がっている（小島前掲書、他）。

3. 大池文雄氏のコミュニケーション論と転向

当時の大池氏が「未来に思いえがく革命は、制度が人間を支配するのではなく、人間が制度を支配することによって、人間の疎外をもたらず一切の制度を死滅させてしまう最後の制度を打ち立てる」ことである（著B、以下同、31

頁)。それが「コンミュン」であり、コンミュンは常備軍を廃し、武装民衆を配置する。警察も中央政府の道具であることをやめ、いつでも解任できるコンミュンの道具となる。司法官は虚偽の独立を奪われ、検事も裁判官も選挙され、責任あり、解任される。銀行は没収され、土地も労働手段もコンミュンの所有に移される。

コンミュンは、普通選挙によって選出された議員によってなり、議会のような団体ではなく、同時に行政府であり、立法府である一つの行動体である。行政府その他のあらゆる部門の官吏も、警察官と同様、いつでも解任できるようにする。コンミュンの議員以下、公務をとるものは労働者の賃金だけをうけとらなければならない。国家の高位高官者達の既得権（位階、勲章等一切の特権を含む）や、交際費は高位高官者そのものととも姿を消してしまう。公職は中央政府の私有財産ではなくなる（33～34頁）。

これがマルクスが『フランスの内乱』で描いたコミューンのはずである。しかし、レーニンは、「プロレタリア独裁の行政権力がついに労働者階級を上から支配してしまふ危険をおかすことに気づかなかつた」（36頁）。また、「マルクスを中央集権主義者と断定し、あげくに「自発的な中央集権制」という矛盾した概念を作りあげた」（49頁）。そして「レーニンはただ理論的にまちがっていたばかりでなく、実践的にもまちがっていた」（50頁）。「党は国家機構と融合し、それを従属せしめ、国有化した財産を基礎に、恐るべき特権を享受する一つの階級に転化した」。「私は今日のソ同盟を官僚の共同会計のための国家」になったとする（53頁）。

「中華人民共和国においては問題は一層単純である。中国の国家権力を掌握した独占的政党—中国共産党は、成立の当初から、スターリニズムの亜流である」（56頁）。「私の手元に『人民中国』1955年12月号がある。そこには「毛主席、元帥の称号と勲章を授与」と題するグラビア頁がある。55年9月23日朱徳以下10人の将軍に元帥称号が贈られ、延べ818名に各種の勲章がおくられることになった。この事実は、中国紅軍が、今や中国6億の人民に支配力おふるう大権力として立身出世主義と特権の温床と化していることを、公然と暴露したので

ある」(67頁)。

この大池氏の主張は、社会主義体制が崩壊し、「共産貴族(ノーメンクラトゥーラ)」たちの存在が常識化している今日から見れば、むしろあたりまえに聞こえるかもしれない。だが、このレーニンから中国共産党までを批判した論文が、1957年に、しかも日本共産党の専従職員である人物によって、雑誌『批評』に公表されるといことが、いかに困難であったかは、想像を絶するものがある。もちろん彼に対する共産党の処置は、雑誌の公刊の停止命令であり、最終的には「除名」処分であった(『アカハタ』1958年7月8日)。

また、大池氏は党内にあって、「ハンガリー革命」を支持することは勿論、農地改革による封建制「再編」説が党の綱領になっているなかで、地主制の廃止の実態を説き、党の人事の不明瞭さを批判した。山口武秀氏(常東農民組合の委員長)の除名に反対し、「党の青年部」のように扱われている「民青团」(後の日本民主青年同盟)の解散を主張した。そして、在日朝鮮人活動家を、50年以降「特に極左冒険主義的偏向の中で、彼等を、もっとも犠牲の多い場所でのようにひきまわしたか」、「いかに不平等な優越的態度をもってのぞんだか」を、厳しく批判した(354頁)。

除名後、大池氏は、ジャーナリズムの途を歩み始める。ここで小島氏の労作『ハンガリー事件と日本』に一言だけ疑問を書くと、その時の大池氏の思想を、黒田寛一氏らとならべて、「ニューレフト」と規定していいのだろうか、という点である。大池氏自身も、「人々が後にニューレフトと名付けてくれた」が、「私達はむしろニュー・リベラルで解党主義的傾向を帯びたグループだった」と規定している(著A, 132頁)。それは、小島氏自身が編集した『奴隷の言葉』のなかの「戦後転向論」(『論争』創刊号, 1959年)を読めばわかる。

新たにフロイト理論を学んだ大池氏は、「マルクスは権威主義的性格の持主であり、レーニンは一層徹底した権力主義者であった」と、レーニンだけではなく、マルクスをも明確に批判する(132頁)。「人民資本主義と呼ばれようが、人間性の自由な成長を抑圧したり、スポイルしたりする社会状況は悪しき偽りの価値をもった社会であり、とりわけ、単一の哲学を押しつけ、自我の成長を

公認の枠にはめ、歪め、不自然な外的権威の奴隷にしてしまう現代共産主義文明とファシズムこそ、われわれがどうしてもさけて通らなければならないものとなった」というのは、明確な脱共産主義、脱マルクス宣言であった(138~139頁)。「戦後転向論」とは、大池氏自身の「転向」声明である。

私は、大池氏の「転向」を考える時、2つの問題が重要だと考える。1つは、20代のほとんどの時間と労力を費やし、大学への進学をも放棄した、共産党からの「除名」である。この時の内面的な苦悩や寂寥感を、大池氏はあまり語っていないが、大きなショックであったろう。そしてもう1つは、彼自身がその身を投げ出していった、日本経済の「高度経済成長」である。師の梅本氏は、彼の転向を「右翼社会民主主義乃至は修正資本主義と結びついている」と評された¹が、そのことを大池氏自身も否定していない(189頁)。

大東塾の遠山影久氏が、大池氏らの「季刊雑誌「論争」のパトリンとなり、出版社「論争社」のオーナー社長」になるきっかけについてもそう言える。遠山氏が『批評』の原稿を読み、大池氏に雑誌の編集をまかせる時、先に依頼していた小山弘建氏(アルクス主義者)と論争させたというエピソードにしてもそうである。「大池、救仁郷組の勝ちだ」と遠山さんは判定を下した。遠山さん自身もこの論争を聞いて、目から鱗^{うろこ}が落ちる思いしたのではないだろうか」と書かれているが、遠山氏はそこに自分の思想的な後継者を見ていたのではないだろうか(大池文雄『私の畸人録』ペリかん社、143、159頁、以下、著Cと略)。ここで蛇足を加えれば、私は、少数しか刊行されていなかった雑誌『批評』を発掘し、大池氏の貴重な言説を紹介された小島氏の業績を、高く評価するものである。

4. 「昭和史論争」と丸山真男氏、「風流夢譚」事件など

私は、インタビューのなかで、「昭和史論争」と丸山真男氏との関係を聞いているが、これは大池氏の『水戸コミュニストの系譜』のなかで、粕谷一希氏が、亀井勝一郎氏と丸山氏の仲介お勞をとった話が紹介されているからである

(239～40頁)。粕谷氏の『中央公論と私』(文藝春秋, 1999年)によると次のようになる。粕谷氏が丸山氏に――

中央公論社に入って最初にお目にかかったのは、亀井勝一郎氏が遠山茂樹氏の『昭和史』を批判して「人間不在の歴史である」と『文藝春秋』で書き、のちに『現代史の課題』という本にまとまる連載を『中央公論』に連載するとき、編集部内で、「亀井さんは歴史に素人なのだから、丸山眞男さんに話を伺ったほうがいいのではないか」という意見がもち上がった。(略)ともかく、同じ吉祥寺に棲む亀井さんと丸山さんに会っていただき自由討論をしてから連載を始めようということになった。

さすがに最後は、丸山氏も粕谷氏に、「君い、なんで私は敵にこんなに塩を送らなくてはならないのかね」と語ったそうだが、「昭和史論争」での亀井氏の資料提供者の一人は、丸山氏であるということは、意外と知られていない事実である(84～5頁)。

最後に、もう1つだけエピソードを紹介しておきたい。「風流夢譚」事件といっても、これも若い人たちは知らないかもしれないが、1960年12月号の『中央公論』に、深沢七郎の小説『風流夢譚』が載った。これは日本に「左慾革命」が起きて、天皇一家が革命軍に襲われ、殺されるという夢の話である。この小説に激怒した赤尾敏・野依秀市氏らによって、中央公論打倒運動が組織される。翌61年2月1日には、17歳の右翼少年小森一孝氏が、嶋中鵬二社長宅に忍び込み、雅子夫人を刺して重傷を負わせ、お手伝いの丸山かねさんを刺殺した事件である(「嶋中事件」とも言う)。嶋中社長は、大日本印刷で校正に立ち会っていて助かった。粕谷氏は、この事件が「中央公論社衰亡の発端」であったとする(184頁)。

粕谷氏の著書によると、1960年秋、「そのころ、八重洲に論争社という雑誌社があった。『論争』という思想雑誌を発刊していて、編集長の大池文雄氏を訪ねたのもそのころである。彼は水戸のコミュニストからの転向者であった」(108頁)と、ポツントと大池氏の名前がでてくる。しかし、この粕谷氏と大

池氏との交友は、大池氏の著書『水戸コミュニストの系譜』によると、嶋中事件以降深くなる。大池氏は――

嶋中事件以降混乱を極めた中央公論社は、やかましく干渉した右翼を排除するに当たって、粕谷さんに頼まれて、遠山景久さんを嶋中鵬二さんに引き合わせたことがあった。(略) 私も遠山さんのお供で、その時初めて虎の門の料亭福田屋(略)の奥座敷で嶋中さんとお会いした。そして遠山さんの使いで、あの騒動の鎮静に少々働いた経緯もあって、粕谷さんと私はいっそう仲良くなった。

と書かれている(231～2頁)。「遠山さんは、暗黒街にも人脈があって、その筋から一目も二目も置かれていた」のである(著C, 134頁)。「風流夢譚」事件の解決には、こうした裏面史もあった。

『私の崎人録』には、遠山氏がラジオ関東の社長になった経緯、台湾独立運動、平和相互銀行の小宮山英機氏のもとで、電話の自由化に努力した話などが、経済小説を読むような面白さで書かれている。人を得て、この辺の話を、大池氏にインタビューしてみてもはどうだろうか。何事も隠し事をしない、というのが氏の信念のひとつである。150年ぶりとかの猛暑のなか、本稿の校正をしていただいた大池氏に感謝するとともに、そのご健康を願いたい。多謝。

大池文雄氏インタビュー

1 生い立ち

今西：本日の主旨のひとつには、いいだもさんが茨城県の運動についてあまりにめちゃくちゃなことを書かれていますので(前掲「ホメロースの『イリアス』『オデュセイ』の一時代の後を承けて」)、それを大池さんに正していただきたい、ということがあります。大池さんの生い立ち、茨城県の旧制高校時代のレッドパージ反対闘争のこと、梅本克己さんの思い出、50年問題、ハンガリー事件、戦後の出版活動のことなどもお伺いしたいと思っています。

大池：私は長野県の小諸の出身です。昔は小諸町といましたが、その郊外の小原という農村で生まれました。小諸は牧野の殿様で御親藩です。表の石高は1万5000石でしたが、だいたい3万石あったと言われていました。それで住民も豊かだったそうです。父の生家は大百姓で、父親は次男坊でした。学歴はなく、尋常高等小学校3年卒です。朝鮮の平壤で重機関銃隊に配属されて2年間向こうで兵役に服しました。その後、父親は結婚して分家し、田畑を少し分けてもらい、屋敷も少し与えられたのですが、小作に出して農業はせず、純水館という製紙工場に勤めていました。

今西：お父さんのお名前は何とおっしゃるのですか。

大池：友吉です。その工場で母親と知り合って結婚しました。母親は急美（タミ）と言います。私は本当は次男なのですが、長男は生まれてすぐに亡くなりました。初太郎と言いました。戸籍は届け出たのですが、いま戸籍から無くなっています。東京に移る時に間違って消えてしまったのではないかと思うのですが。なぜ東京に来たのかというと、父親が製紙に未来はないと考えたのです。ちょうど昭和恐慌の頃です。

今西：お生まれは昭和3年（1928年）ですか。

大池：はい、11月6日です。

今西：昭和恐慌は1929年からですね。

大池：東京に出てきたのは1932年頃だと思います。父は警視庁に入りました。その時、女房と子供が3人おりました。私の他に妹がふたりです。住んでいたのは日暮里1丁目です。父親は良く出来る人でした。拳銃の名手でしてね。東京オリンピックのピストル射撃のコーチをしていました。兵役で平壤の銃機関銃隊に入っていましたが、機関銃隊は歩兵銃は持たされず、白兵戦では専ら護身用の拳銃です。射撃は天性のもので、練習したからうまくなるというものではない。警察官の時に神宮大会に出場しました。今の国体です。勤務先の所轄署の署長から話があって、自分が出ると名乗り出たそうです。家にもブローニングを持って帰ってきて手入れしていました。予選でトップになりました。99点だったと言っていました。本番の大会では6位でした。ちょっと天才的など

ころがありました。剣道も五段でした。真剣で形をやって武道館で五段をもらってきました。

今西：小学校はどちらに通われたのですか。

大池：荒川区の第四峡田尋常小学校です。当時住んでいたのが荒川区町屋1丁目でした。小学校に入ったのは2・26事件の前の年（1925年）でした。2・26事件の時は雪が降っていました。校門まで行ったら副校長がいて、今日は学校休みだ、と言うわけです。喜んで家に帰りました。小学校の成績はトップでしたが、総代は大地主の子で、成績もよく朝日新聞の健康優良児でした。世間というものを少し学びました。

今西：2・26事件は1年生の3学期になるわけですか。

大池：そうです。大変なことが起こったのだと後で親から教わりましたが、あまりよくわかりませんでした。小学校を出る頃に国民学校になりましたので、正式には第四峡田国民学校卒業です。国民学校の1期生です。小学校の風景を申し上げたいのですが、下町ですから雑階級的で、高級官僚や大会社の幹部の息子や地主さんの息子もいましたし、職人の子供やお坊さんの子もいました。クラスにひとりだけ生活保護を受けている家庭の子がおりました。その子は時々しか学校に出てこないのですが、出てくると昼休みに小使室に行くんです。そこで弁当が出るんです。

今西：生活保護の子には弁当が出たのですか。

大池：そうです。我々とはあまり口をきかない、おとなしい子でした。人口がどんどん増えて、子供の数も一気に増えていった頃でした。

今西：その頃は、東京もまだ田舎っぽい雰囲気が残っていましたか。

大池：町屋一丁目はもう都市化していました。荒川区は当時すでに35万人の人口を抱えて、東京一過密だと教えられました。住民の大半は長屋住まいで、共同水道でした。日暮里の方に通じる尾竹橋通りが拡巾され歩道のある立派な舗装道路になって、両側にはおもちゃ屋、呉服屋、寿司屋、おかず屋、魚屋、乾物屋、薬局から大衆酒場迄、ありとあらゆる商店が並んでいました。お菓子屋、パン屋、楽器店までありました。町屋一丁目は、昔は稲荷前と言っていました、

今の都電早稲田線町屋駅前停留所の北側一帯です。近くに博善社の火葬場や、三河烏浄水場がありました。この浄水場は広大な土地に何百という数の糸車のようなものを回して下水を浄化するのです。中に入り込んでよく遊んでいました。出口のところで、飲めるほどきれいになった水がものすごい勢いで流れ出てくるのを眺めていました。

また、区立児童図書館があり、好きな場所でした。ジャンバルジャンや小公女を読みました。5年生になると本屋で岩波文庫を買いました。ウィリアム・ブレイクの詩集など印象に残っています。映画は何と言っても「鞍馬天狗」です。それから「風の又三郎」「加藤隼戦闘隊」「綴方教室」。

今西：小学校の頃は、もう軍国主義教育が強くなっていた時期ですよね。

大池：あまり無かったですね。

今西：無かったですか。

大池：これは説明が難しいのですが、日本は大正期を挟んで、戊申以来ずっと軍国なのです。ペリー来航以来と言ってもいいでしょう。殊更の軍国主義教育といえるものよりも、教育勅語が小学校の修身（倫理）教育の中心でした。日支事変がはじまった時が、ちょうど私達の小学生時代で、紀元2600年祝典があり、隣組が作られたり、千人針や慰問袋などは婦人会や高学年の女子児童が熱心にやりました。3年生の2学期に私の作文が当時ちょっとしたブームだった『綴り方教室』という雑誌に載りました。ところがその時の担任で、指導教師として私と並んで名前が載った先生が、3学期に出て来ないのです。転任と発表されただけで、どこへ行ったのか教えてくれない。父は、「アカだったのかなあ……」と、母と首をかしげていました。5年生の時、ほかのクラスの担任で、支那兵の捕虜を侮辱するシナリオを書いて学芸会で児童にやらせた。こういう便乗型の人もありましたが、これは例外です。大体、小学校の教師は大正時代の自由主義・消費文化の中で青少年期を送った人が大多数です。このことは、昭和初期の児童教育を語るのに欠かせない視点です。小学校が国民学校と改められた頃から戦時色が濃くなっていきましたが、それでも世間では、熱海などの温泉宿に戦時景気の人達が、馴染みの芸者やカフェーの女給達と繰り出

して大賑わいだったのです。経済統制や徴用が激しくなって、商店も店じまいし、家庭の貴金属や鉄瓶、寺の梵鐘まで供出させられるようになるのは私達が中学2～3年生位の時です。

アメリカに対しては敵視というより羨望の方が強かった。中国に対する蔑視はありました。中国人のことは「ちゃんころ」と呼んでいました。日本は総力で満洲国を建設しなければならないということは小学校の頃には思っていましたし、学校でもそう教わっていました。日清戦役の海戦の歌で「まだ沈まずや丁遠は……」という唱歌、日露戦争では「屍は積りて山をなし、血潮は流れて河をなす」という橘大隊全滅の歌など習いました。修身では爆弾三勇士がいましたが、取り立てて軍国教育というより戦時の児童教育としてはごく普通のことではないでしょうか。

今西：鬼畜米英というのはありましたか。

大池：それは中学に入ってからですね。鬼畜米英と言い出したのは大東亜（太平洋）戦争が始まってから、1942年頃からです。反英米仏はビルマの援蒋ルートをめぐる争いあたりから強くなりました。ドーリットル揮下16機のB25の東京初空襲より後だったのではないのでしょうか。反米意識は教育よりもむしろ新聞からの影響でしょうね。朝日新聞です。

今西：あの頃の朝日新聞の論調は好戦的ですからね。

大池：中学校では、ABCDラインができて石油が止められた、これでは日本は生きていけない、と言われたぐらいで、その他のことはあまり言われませんでした。三国同盟ができたときは、非常に強力な世界の同盟国になったという話があり、そう思いました。中学時代の思い出としては、1年生の時、三国同盟を記念して開かれたと記憶していますが、上野の池の端でレオナルド・ダ・ヴィンチ展がありました。当時は博覧会と言っていました。流れて行った水が複雑な経路を経て戻って来たり、途中で水車を廻してその動力を推進力にしたたり、子供には大変ショッキングな展覧会で、永久運動の機械の模型などが作ってありました。会場の真ん中にあつた階段の正面の壁に実物大の「最後の晩餐」の複製が飾られていましたし、人体解剖図や数学のノートも展示してありまし

た。衝撃を受けました。こういう偉人がいたのか、と。

今西：中学はどちらだったんですか。

大池：府立第十一中学です。入って間もなく、江北中学と名前が変わりました。いまの都立江北高校です。校長は著名な教育者の大森乙五郎でした。東京学芸大の前身の青山師範学校（現東京学芸大学附属世田谷高校）に我々の寄付でブロンズの胸像が立っています。大森校長のおかげでいい先生が集まっていました。私は4期生です。中学校にも都立四中のように陸士・海兵合格率を誇っている学校もありましたが、十一中（江北中）のように、旧制学校・専門学校、一流私大予科の進学率を重視している中学校も多かった。十一中は、全校生徒が参加する陸軍の軍事演習の査察の評点は、甲・乙・丙の丙だったように記憶しています。

今西：卒業されて軍の学校に行かれたのですね。

大池：1943年の暮れに試験を受けました。下士官が不足していたので少年兵で補充しようと15歳以上の志願兵をとったのです。中学3年修了時点です。これに志願して、兵庫県の加古川にあった陸軍加古川少年航空通信学校に入りました。

今西：卒業すると航空兵になるのですか。

大池：それが違いまして、地上勤務で通信をやるのです。実戦で通信に携わった者は、台湾と満洲に行きましたが、多くは通信とは関係なく、陸軍兵力の補充で沖縄でした。教育が終わったのは1945年の2月で、お国のために命を捧げようと思っていたのですが、私には一向に動員令が下らないんですよ。准尉（総務・人事）のところに、どうして動員令が下らないのか聞きに行きました。准尉も困っていましたが、おまえは一人息子か、と訊くわけですよ。後で気がついたのですが、一人息子は除外したんです。

今西：家を大事にした時代ですから、家をつぶしてはいけなと。

大池：その時は、何故そんなことを訊くのかわかりませんでした。暗示をくれていたのですね。それでどこに行ったのかというと、国分寺の小平町に当時の東京商大の予科のキャンパスがありまして。

今西：小平には戦後も一橋大学の教養部がありました。

大池：そこに陸軍東部第九十二部隊という看板がかかっていました。それは電波兵器学校なんです。ここに入りました。いいキャンパスでね。西のはずれの雑木林の奥に行くと、太宰治が心中自殺した玉川上水があります。覗くのが怖いような川でした。

今西：玉川心中の場所というのは、それほど流れが激しい川だったんですね。

大池：すごい急流なんですよ。絶対に助かりません。その急流に沿って雑木林を北の方、つまり上流に歩いて行くと右手に大きなキャンパスがあります。津田塾です。5月に東京で大きな空襲があったのですが、3列に並んで入ってきたうちの真ん中の列の1機のお腹の部分が光ったんです。爆弾落としたな、と思って、私は班長をやっていたから防空壕に入るよう大声で叫んで、自分も入りました。するとものすごい音がしてね。飛び出して行って消火活動をしました。私の班は本館の担当だったのですが、どうにか消火に成功しまして本館は助かり、私達は賞状をもらいました。我々が寝泊まりしていた寮が焼けてしまったのですが、そのとき寮防衛の班が陛下から授かった帯剣をつけないで、踵のついたスリッパ（営内靴）を履いて、B29の侵入を見物していました。彼らの帯剣が焼けてしまったのです。これはひどく叱られまして。

今西：それは当時としては大変なことでしょう。

大池：校長は大佐で、陸大の入試を控えていて、合格間違いなし、と言われていました。当然将官になるはずの優秀な人でしたが、そのことがあって断念されました。

今西：もう将官にはなれないわけですね。勤労働員はなかったのですか。

大池：中学の同級生達はありました。しかし私は陸軍の航空通信学校、ついで電波兵器学校におりましたので、歩兵の基礎訓練は一通り受けましたが、学習から離れることはありませんでした。午前中が授業で午後が実習でした。幸運だったのかもしれませんが。中学の同級生は1943年の10月から11月頃、つまり4年の2学期で卒業させられて、試験も無しに成績と志望を勘案して、それぞれの高・専・大学予科に割りふられたわけです。それで4年生の時に勤労働員が

あったのです。学校が綾瀬にありまして、日立の亀有工場に行かされたのがほとんどでしょう。授業は昼休みや夜に補習をやるのです。ですから、ほとんど勉強できなかつた。

今西：戦争中は勉強できなかつたようですね。特に語学は、英語など敵性語ですからほとんどやっていない。

大池：敵性語の話をしますとね、入学した頃は週に6～7時間英語がありました。3年生の終わり頃に少し削られましたが、それでも週4～5時間ぐらひはありましたかね。英語の先生が追放されるというようなことはありませんでした。

今西：アメリカかぶれの人やモダンな人は嫌われた、ということはありませんでしたか。

大池：英語の先生で若い元気なイガグリ頭のクリスチャンの方がいましてね、上級生が喧嘩をふっかけていました。校庭から呼び出すわけです。するとその先生、石垣先生といましたが、校舎の窓から顔を出してどなるのです。上級生達は「アンチャン」というあだ名をつけていましたが、英語教師だからとか、クリスチャンだからとかいうことではなく、若い先生をからかい半分に嘲したてたのだと思います。私自身には、クリスチャンはやはり異質だという感じはありました。

今西：クラブ活動などはやられていましたか。

大池：やっていませんでした。文芸雑誌のようなものは校友会の予算で出していました、私自身は特に関わっていません。

2 1945年の夏

今西：疎開はされていませんか。

大池：田舎の小諸に屋敷と田畑がありましたので、母親と妹ふたりはそこに疎開していました。妹たちは県立小諸高女に転校しました。戦後復員して私も小諸に行きました。中学の5年目が復活することになりましたから、2学期から4年生に編入されたんです。復員兵は1クラスに3～4名ほどでした。県立岩

村田中学というところです。そこに1学期間いて、あとは一生懸命百姓をしていました。このまま百姓やろうかなあ、なんて思っていました。そのことを父親の兄に相談したんです。家の前の地続きに本家の伯父の家があったのですが、その伯父が父親に、文雄が百姓やると言っているがどうするんだ、と手紙で訊いたらしい。親父は、本人の思うままにさせてくれ、と答えました。親父はいつもそういう風に答えるんです。ですが、そのうちに向学心が芽生えてきまして、東京に出て勉強したいと思うようになりました。親父が西新井大師の書院に部屋を借りていまして、東京に出て、十一中に顔を出しました。玄関で、「大池です」と言ったら校長先生が出てきてくれましたね、「大池君、君に卒業証書が出ているから持って帰りなさい」、と言われました。前々年の4学年2学期修了時点の繰り上げ卒業の時のものです。それで、「ぼくは卒業免状をもらいに来たのではないんです。勉強しに来たのです」と言いましたら、「そうか、じゃあ上がってくれ」と言われ、すぐに岩村田中学からの転入願の書類を受理して転入手続きをとってくれました。

今西：4年で卒業しても、5年でしてもよかったのですか。

大池：実際4年で卒業になっているのですから、そのまま卒業してもよかったのですが、卒業証書はもらわずに、もう1年残って勉強することにしました。その時にいろいろな経験をしたのです。先生たちがひどく自信喪失していました。体も大きくて怖かった数学の先生も、どういう風に生徒に接したらよいかわからないという感じでした。

今西：敗戦後ですから、戦後教育も大きく変わるわけですよ。

大池：自信の無さそうな、本来の自分を失ってしまったような感じでした。別に軍国教育をしていたわけではないのですが、戦前はおっかない先生だったんです。学校の雰囲気は何かおかしかったですね、暗かったんです。そうしたら誰かが、体育館入口の中2階にあったテーブルを見つけて、そこで卓球をやるうと言い出しましてね。私もそこに加わりました。勝ち抜き戦です。どんなに強くても、だいたい5人ぐらいやると負けるんですが。これは元気が出るなと思ひまして、クラス対抗と、教員と生徒の対抗戦を私が提案しました。成績

なんか貼り出しまして、全校巻き込みました。それで学校の中が明るくなったように感じました。その時、自分では自覚は無かったのですが、私の周りに人が集まるんです。大池は人に愛される、とこれは後で人に言われました。

今西：大池さん自身に敗戦のショックは無かったのですか。

大池：ありましたよ。どういうものだったかと言うと、前線で砲火の下で戦って負けたわけではないでしょう。村山貯水池、多摩湖ですね、その人工的な堤防の東の外れに電波兵器の野外演習場があったんです。そこで1945年の8月に演習をやっていました。演習に行く前にB29がやって来まして、ビラをまいたんです。「伝单」と呼んでいました。電波兵器学校の敷地にも何枚か落ちた。拾ったら本部に届け出なければいけないのですが、何か怪しいと思って私は一人で林のなかに拾いに行ったんです。そうしたら、トルーマンが執務室で電話している写真があって、ポツダム宣言の要旨が書いてありました。私も知識人の卵でしたから、それを読んだ。すると、日本に降伏を勧めているということがわかった。その後に多摩湖の演習場に行きまして、終戦を迎えたのです。カンカン照りの日でした。

その前に広島に原爆が落とされたでしょう。初めは特殊爆弾と新聞などには書かれましたが、翌日の昼に学校で発表されたのです、広島に落ちたのは原子爆弾であると。科学をやっていた学校ですから正確に伝えられた。空中で爆発して閃光を發し、半径5キロ以内は全滅したと。閃光で焼かれた人達は全身ペロッと皮がむけて死んだと。翌日の昼にはそこまで教えてくれました。これはしんどいことになったな、と思いました。その日の夜に空襲があり、防空壕に入りました。その空襲警報は、単機侵入のものでした。広島と同じでしょう。ただ深夜ですが月明です。広島の場合は当然東京だと思っていましたから、膝頭が小刻みに震えて、歯の根が合わない。これで今生の別れだと観念しました。飛行機は、いやがらせだったのか、何もせずそのまま行ってしまいました。

今西：玉音放送は聞かれたのですか。

大池：聞きました。村山で、真っ青な晴天の空の下で、整列して聞きました。何を言っているのかわからなかったけれど。

今西：みなさんそう言いますね。

大池：ただ、中にポツダム宣言という言葉が入っていた。それで、ああこれは負けたんだ、とわかりました。前に伝単を見ていましたから。午後は解散になりまして、内部整理だと言われ、部屋に戻りましたら、陛下は何をおっしゃったのだという話になりまして。激励されたのではないかと。

今西：戦意を高揚させて、これからもっとがんばろうと。

大池：それにしては声がおかしいのだけれども。みんながそう言っているものだから、私が「負けたんだよ」と言ったら、みんなも「そうか?!」と。「ポツダム宣言とおっしゃっていたから、負けたのだ」と重ねて言うと、じゃあ将校のところへ訊きに行こうと、3人ほど連れだって行きました。日本は負けたのだと将校から聞いて、しょんぼりして帰ってきました。その時の心境というのは、なかなか難しい……終わったんだという感じだったのでしょうか。

今西：もう空襲も来なくなるし。

大池：というのも、15日の玉音放送の直前まで「ピーゴロ」が来ていたんです、P-51が何機も。ところが12時になったらピタッとみんな引き上げて行っただけです。そうして何も無くなって静かになったところで玉音放送があったのです。そういう体験でした。

敗戦になって何をしたかと言うと、軍籍にいたということを隠せということで、電波工学の本などはすべて焼却しろと言われました。

今西：陸軍士官学校や海軍兵学校に行った人は、日記まで全部焼却しろと言われたようですね。戦犯だと追及されることを恐れてそういう命令が出たようです。

大池：16日に貯水池の堤のわきに穴をいくつか掘って、解体した機材を片っぱしから放り込んで始末しました。迎いのトラックの荷台に乗って、土煙をあげて帰隊する時、夫婦らしい農夫がわき目もふらず黙々と畑仕事をしていたのが印象的でした。何か腑に落ちた感じでした。

今西：民衆の生活は変わりなく続いているわけですからね。

大池：その後、荷物をまとめて上野駅から信越線で小諸に帰りました。8月20

日のことです。上野駅に行って並んでいたら、復員証明書を持たないで除隊した人間は原隊に戻って取って来るように、という放送が流れていました。そんなの持っていってもしょうがない、と思ってそのまま列車に乗りました。

今西：少年兵といえども軍人ですから、本来は復員証明書が必要なわけですよ。でも、戦争に負けているわけですから、関係無いですね。持っていても仕方が無い。高橋さんは。

高橋行雄：私は当時中学1年生でしたが、学校で玉音放送を聞いて帰宅すると、家の者が皆げらげら笑っているんですよ。私は怒ったんだけど、嬉しかったんでしょうね。でも、考えてみると、男は町中全部黙っていたね。何をしていたのか分からなかったんだらうね。

今西：一種の自信喪失ですからね。女性は日々の生活がありますから、変わらず暮らしていけますが。高橋さんのお生まれは何年ですか。

高橋：昭和6年（1931年）です。

大池：小諸の駅から歩いて帰る時は、何かせつなかったですね。自分は敗残兵なのだ。その時はじめて、自分は兵隊だったんだという切実な感情に襲われましたね。着いても自分の家には入らず、すぐ前の本家に行きました。そうしたら飯を食べていましてね。庭の縁先から「お祖父さん」と呼んだら、年上の従姉妹が出てきて、「文雄ちゃんが帰って来たよ」と。何とも言えない気持ちでした。それから家に戻って母親に会いました。そういう敗戦でした。その後農作業をしながら、勉強したいという気持ちがわいてきて、東京に出たのです。

江北中では卓球部を作りましたが、私は他の生徒より1学年上ですからね。そのせいもあって統率力がありました。七中が噂を聞きつけて他流試合を申し込んできました。部員を集めて小さな応援団も作りまして、七中へ遠征して試合したら勝ったんです。同点で最後に主将戦になって、僕が出て勝ったのです。

3 旧制水戸高と梅本克己氏

今西：その後、水戸に行かれるわけですね。

大池：どうして水戸高校に行ったのかと言うと、中学の先生のところに、どこを受験したらよいか相談に行ったんです。そうしたら、水戸だったら受かるんじゃないか、と言われてましてね。じゃあ受けます、と言って受けたら合格したんです。当時は試験が2日間ありました。水戸市東原の本校は焼けてしまっていたから、常磐線で東京へ三つ寄った友部の海軍飛行隊の跡が学校と寮になっていて、そこに泊まって、試験もそこで受けました。

今西：受験科目はどんなものでしたか。

大池：全科目ありましたよ。高等学校はすごいなと思いました。最初に作文がありまして、国語、英語、歴史、漢文、数学、物理、化学、数学は代数と幾何でした。

今西：それはレベルが高いですね。

大池：いちばん最後に知能テストがありました。私は勉強が嫌いでしたから、特に英語はもっとやっておけばよかったなあ、と思いました。ほとんどやっていませんでした。他には早稲田の高等学院も受験しました。こちらの試験は1日で済みました。水戸からは、なかなか通知が届かなかったんです。そのうちに早稲田から合格通知が来ました。それで早稲田に行こうと思っていたところに、水戸からも第一志望の文科甲類の合格通知が届きました。

今西：それで水戸高に入られて、梅本克己さんと出会われたわけですね。

大池：最初に授業で会いました。つまらない授業だなあと考えていたんですよ。

今西：論文のイメージと授業がずいぶん違ったようですね。

大池：倫理学の授業で、ギリシア哲学から話していましたが、つまらなかったです。

今西：梅本さんは、東大の倫理学科で和辻哲郎さんの弟子だったんですよね。

大池：一番弟子と言われていました。

今西：『回想梅本克己』（前掲書）によると、水高の校長が俗物で大変だったようですね。

大池：私が入学（1947年）する前の年に、校長排斥のストライキがあって追放されたんです。

今西：安井校長排斥のストライキには関わっておられなかったのですね。

大池：ええ、私が関わったのはイールズ（GHQ 民間情報教育局顧問）のレッドパージ反対闘争（1950年）の時です。

今西：イールズは講演に来たんですか。

大池：来ました。イールズの片腕のフォックスというのが。

今西：共産主義者を追い出せ、というようなことを話したのですか。

大池：そこまで露骨な言い方はしませんでした。教育の現場に好ましくないというように言っていました。

今西：北大の講演（1950年5月）ではかなり強力な共産主義批判をやったようです。水戸では、東北大学の反イールズ闘争のように、イールズを追い出そうという動きはなかったのですか。

大池：追い出すといより、6・3・3・4制の新学制の大学法に反対したのです。すでに新学制は発足しておりましたから、実際には強烈に抗議の意思表示をしたわけです。当時の校長からは、ストライキはやめて学生の本分に戻れと言われましたが、私は突っ走ったんです。今里という後に鉄鋼労連の書記局長になって活躍した友人を自治会会長に選出して、私はフラクションを指揮してストを決議しました。

今西：梅本さんは、旧制水戸高から新制茨城大学に切り換わる時に、不適格だとされたのですよね。

大池：不適格だとは言わないんですよ。ただただ辞令を出さないんです。クビだとは言わずに新制移行を利用して、実にうまく首を切ったのです。最後には、退職金がもらえることもあって、梅本さんの方から辞表を出しました。あれが失敗だったと本人は言っていました。梅本さんは親鸞を研究していたわけですが、戦後の梅本の思想の根幹に、歴史は必然であるという抜きがたい唯物史観が据えられました。そして、人間性の中には客観的に対象化できないものがある、それを唯物弁証法が全的に包括しうるかどうか、というところから「主体性」が生まれてくるわけです。この考えに私は衝撃を受けました。マルクス主義に初めて触れたのもこの時です。

今西：『展望』に載った一連の論文（1946～1947年）ですね。

大池：歴史がもし必然であるならば、個はどうして個たり得るか、という問題としてそれを受け止めました。私は必然を仮定型でとらえたのです。その意味で、梅本さんとは最初の時点で少し考えが違いました。後に気づいたのですが、問の前提と解の目的が逆転していました。梅本さんは懐かしい人です。こんなに懐かしい人は他にはいない位です。私は梅本の一番弟子といわれましたが、やがて私は思想的に梅本から離れた。これは気質の違いからとしか言いようがありません。

2年の3学期に細胞委員長になって、梅本家に入出入りするようになりました。「第二自由研究会」というのをやっていました。梅本さんが立命館に行かれた後は、私が梅本さんの代理のようなことをしました。梅本さんは戦時中、登壇停止になっていたんです。

今西：梅本さんは戦争中、文部省の教学局思想課におられたんですね。

大池：教員審査をやっていたんです。教員の赤化事件が多かったですからね。それで嫌になってしまったんです。

今西：途中でやめてしまったようですね。

大池：その後、外務省の外郭団体だった「国際文化振興会」に入って、そこで伴侶の千代子さんと出会います。そして、水戸高校生徒課長をしていた久保謙が教え子だった梅本さんに惚れ込んでいて、水戸に呼んだのです。

今西：久保謙さんとの友情はずっと続いたようですね。

大池：久保さんは自由主義者で、梅本も自由主義者だったのですが、登壇停止から復帰するとマルクス主義者になっちゃった。ただ、親鸞の卒業論文（「親鸞に於ける自然法爾の論理」、『過渡期の哲学』所収）ではそういう傾向は見られません。

今西：あれはマルクス主義者とは思えない論文ですね。梅本さんは、マルクス主義と実存主義の両方の影響を受けているわけですね。

大池：親鸞からも実存主義的な影響を受けたんですね。それにキルケゴールやヤスパースの影響もありました。

今西：親鸞については、倉田百三の『出家とその弟子』に影響を受けて興味を持たれた、そうですね。

大池：戦後は一直線にマルクス主義に行きましたが。

今西：『展望』の論文からは完全にそうですね。ですが、自由とか道徳とか主体ということを強調するのは、マルクス主義者では珍しいですね。

大池：水高の教授の梅本が『展望』に書いている、というので読んだんですが、ショックを受けましたよ。

妹が明治大学の女子部に行っていて共産党員でした。中央大学学生自治会の中執委員長をしていた小椋八州夫と恋愛関係になりましてね。東京に帰省した時にその周りの連中など一杯飲んで大騒ぎしているうちに、こういう連中と一緒に元気がなくなればいけないなあと思いました。太宰治が死んだことにショックを受けたりしていましたが、そんなことでは駄目だと。それで虚無的な状態から脱出しまして、共産党に入りました。水高細胞には小島晋治がいました。党員の中では一番尊敬していました。

今西：中国史の大家ですね。

大池：1級上だったんです。秀才でした。彼が大学に行くというので、細胞キャップを引き継げと言われました。

今西：小島さんもキャップをやっていたのですか。

大池：キャップだったかどうか、とにかく信頼され、好かれていた幹部でした。その小島さんの命令でキャップになりました。

今西：大池さんは最初、京都学派の田邊元さんの影響を受けておられたのでしょうか。

大池：それが主体性論とつながっているのかも知れませんが。哲学というのは、私にとっては田邊元でした。

今西：戦後も彼の議論は流行しましたからね。

大池：難解でね。参りましたよ。水戸高の同級生で田邊元に本気で取り組んだのは私一人だったと思いました。

今西：京都学派は難解なんですよ。

大池：キャップになってからは、梅本家とも個人的な関係が強くなりました。
今西：来栖宗孝さんと安東仁兵衛さんと、高校時代にお付き合いはあったのですか。

大池：安東仁兵衛との関係は、まず私が入学したときに歓迎コンパがありまして、私も演説したんです。伝統であるストームなんかやっているけれども、旧態依然です。伝統というのは絶えず革新を繰り返さなければ減びてしまうのではないか、ということを行いました。そうしたら安東が立ちあがってヤジったんです。それが最初の出会いです。彼は3年生でした。私は文学少年で文芸部におりましたが、その当時に付き合いはありませんでした。付き合いが始まるのは梅本家に入出入りするようになってからです。特に彼が常東農民組合で活動するようになってから、非常に親しくなりました。私の家に寄って風呂に入ってパンツを取り替えてから梅本さんの所へ碁を打ちに行ったり、常東に戻ったり、自分の家に帰る、というような仲でした。来栖さんとの付き合いは、国際派解散後、新聞社を立ち上げてからです。彼は脊椎カリエスの妻君の看病に明け暮れていて、党活動はノータッチです。法務省の役人で、役人ですから期限無し
の休暇で給料をもらっていたのでしょう。彼は活動歴は皆無です。

今西：大池さんが主導されたストライキは、梅本さんへの処分反対が理由だったのですか。

大池：学制改革での大学法、新制大学制度への反対が第一項目でした。梅本処分はその後です。水戸高教授に大学教授の辞令が出たのは翌年の初めだったと思います。梅本にだけ辞令がでなかったのです。

今西：旧制高校を残せ、ということですか。

大池：それが中心でした。加えて、イールズに対する反対です。でも、ストで大学法を阻止できるとは思いませんでした。旧制高校の誇りと意地を示す意思表示だったのです。

今西：当時の北大や東北大のイールズ反対闘争に呼応したわけですか。

大池：全学連がストライキの指令を出したのですが、他はほとんど動きませんでした。宇都宮の高等農林が水戸の1日前に2日間ストライキをやりまして、

こちらも2日間やりました。整然とストライキをやったのはこの2校だけです。

今西：梅本さんのレッドパージは、ほとんど取り上げられなかったのですか。

大池：レッドパージされるとは思わなかったんです。

今西：梅本さん以外には信任されなかった教授はおられなかったのですか。

大池：いませんでした。左翼的な教授はいましたけどね、島田雄二郎とか。

今西：西洋史の島田さんも左翼だったのですか。

大池：まあ、そうですね。朝日新聞水戸支局に親しくしていた記者宮下展夫がいました。彼は後に本紙文芸部長を経て朝日ジャーナル創刊時の編集長になりました。その頃論争社の編集長だった私は、彼に森恭三さん（ジャーナリスト）を紹介してもらいました。その宮下から、義公（徳川光圀）250年、烈公（徳川斉昭）の150年祭について誰かに書いてもらいたいのだが、という相談を受けまして、島田さんに書いてもらうのがよい、と勧めたことがありました。それで島田さんがコラムを書きました。戦時中東天会という水戸の資産家の子弟たちの右翼団体があります。これは東条英機暗殺計画で一網打尽になった連中です。菊池吾一というのが親方でした。菊池の父親は、菊池謙次郎という有名な教育者で、水戸一中の校長をしていた人です。菊池謙次郎自体は右翼ではなかったと思いますが、試験制度を撤廃して無試験にするなど、文部省とはまったく違うことばかりいつもやっていました。吾一さんの人柄が好きでよく家に入り出て、彼に愛されてもいたのだけれども、彼が、島田はとんでもない奴だ、と言うわけです。義公と烈公をけなすようなことを新聞に書いて、水戸ではろくなことは無いぞ、と。

今西：東天会の人達の間では、やはり水戸学の伝統が強かったわけですか。

大池：絶対と言っていいほどあります。東天会のメンバーとはずいぶん親しくなりました。私のことを「先生」と呼ぶ者もありましたし、共産黨員になった者もあります。

今西：大池さん自身は、水戸学についてどう考えておられたのですか。

大池：当時は読んでいませんでしたが、水戸学の雰囲気のようなものは菊池など東天会の連中から聞いていました。すごく誇り高いものです。私の家内は士

族の娘でして、義公が作ってくれた水戸家のお墓で、士族は全員そこに入っているのですが、家内の家の人間もそこに入っていました。水戸家のお墓に入っているかどうか、というのは、水戸での隠然たるヒエラルキーです。

今西：士族の誇り高さは強烈ですね、戦後社会まで強く残ります。

大池：水戸高文芸部の1年先輩で部長をしていた加固三郎というのがおりましたが、やはり水戸の士族の出で、そういう誇りを持っていました。

今西：話を戻しますが、梅本さんは、水戸のそういう雰囲気の中かで「共産主義者宣言」をやったわけですね。その時の学生たちの反応はどうか。

大池：教室でマルクス主義を説くということはしませんでした。

今西：一般的な倫理の講義をしていたわけですか、退屈な。

大池：そう、退屈な。社研にいた生徒などから冗談で、革命と恋愛は二律背反的だがどうするのか、どっちを選ぶんだ、なんて質問が出て、恋愛をとるなあ、革命は捨てる、などと答えて笑わせていました。千代子夫人との仲を考えると半ば本音でしょう。

4 茨城の実践運動へ

今西：大池さんの水戸高校中退というのは退学させられたのですか。

大池：そうではありません。レッドパージの年、1949年で、反対闘争をやったわけです。

今西：当時は官公労、小学校から全てやられていますからね。

大池：国鉄機関区で、夏休みに水高生80人ほどを連れてデモをやって演説して歩いたんです。でも、反応が無いんですよ。あのレッドパージ反対闘争は惨敗ですね。

今西：そうですね。全国で1万人以上処分を受けたわけですからね。

大池：みんなソッポ向いて応援しないわけですよ。自分の身がかわいくて。共産党もプロレタリアートだ、労働者階級だと一生懸命煽動しましたが、みんなまずは生活防衛なんです。共産党の味方をして自分がクビになっては元も子もない、というわけです。かといって、ここに演説しに来るなどは言わない。で

も、きわめて冷淡でしたね。その後、デモに行った同級生は帰郷したのだけれども私は水戸に残りました。共産党県委員会が出していた『茨城民報』という新聞の記者になって、あちこち取材しました。それで、夏休みが終わっても学校に出なかったのです。こちらの方がおもしろいから。そうしたら先生がやって来て、学校に戻りなさいと言うわけですが、もう少しで卒業なんだから、と。でも、もう学校には興味は無い、と話しました。その人は国文の先生だったのですが、県委員会常任委員の横山静一郎という日教組県青年部長をやっていた教員上がりの人間のところに行って、大池は東大に行って国のために将来働く人間なのだから学校に戻してくれと言ったらしい。横山は、それは本人の意思だから、と答えたそうです。そんなことがあったとは後で聞いたのですが。

今西：大学に行ってエリートコースを歩むよりも、革命のため、人民のために生きようという気持ちがあったのですか。

大池：そうですね。49年の秋口から日立製作所のストライキが始まります。90日間。その前には高萩炭鉱の閉山がありました。300人が働いていて、ストもやったのですが。そういう時代でした。日立の方は相当激しくて、激しさに酔いしれているようなところがありました。課長や係長をドラム缶の上に座らせて取り囲み、ドラム缶を棒で叩くのです。そこへ天井からバケツの水を落とすようなことをしていました。雨のブルースとか言って。当時日立製作所には5万5500人の労働者がいて、社長の倉田主悦が人員1割カットを打ち出していたのです。今でこそストラなど簡単にやっていますが、当時は大騒ぎでした。

今西：国鉄のクビ切りで下山事件（1949年）も起こったわけですからね。2・1ゼネスト（1947年）以降、高揚した時期でした。49年ですと、革命近し、という雰囲気だったでしょう。では、50年分裂の時は『茨城民報』の記者をやっておられたのですか。

大池：私は出世が早くて、高校を辞めた頃には共産党水戸地区委員会の委員長になっていました。水戸市の党員は200人おりました。

今西：それはむちゃくちゃ早いんですね。高校生からすぐ委員長ですか。

大池：遠坂良一の推薦というか、指名です。遠坂は当時、県委員長でした。水

戸地区は茨城県で最大の委員会でした。50年の1月には県委員候補になります。

今西：それも早いですね。

大池：日立の闘争が敗北したときは県委員候補でした。あの敗北には困ってしまいましたね。日立労組の委員長は東大出の小林公正という人間でしたが、共産党では県委員でもあり、よく県委員会に報告に来ていました。最初のうち小林は、全国から米俵が届いて山積みになっているなど景気のいいことを言っていました。闘争資金も潤沢でした。しかし、相手がまったく動かない。90日間ストをやって、もう打つ手が無くなってしまった。最後に倉田社長に直談判しようとして、本社の建物に梯子をかけて、一人で小林が窓を割って侵入したんです。そうしたらすぐに警察に通報され、連行されてしまった。住居不法侵入の現行犯です。

今西：かなり過激なことをやっていたのですね。

大池：結局は過激というよりも小林の自暴自棄、自殺と表裏の行為です。完全敗北で全員クビになった。県委員会は小林をブランキズムだなどと批判しましたが、後の祭りです。高萩炭鉱も閉鎖になっていましたから、拠点が無くなってしまいました。国鉄労働組合も産別会議が握っていたのですが、レッドパージで駄目になりました。東電も全通信も国鉄も日教組も。共産党はプロレタリアのいないプロレタリアの前衛党になってしまった。

話は飛びますが、共産党員は共産党以外の人間と仲良くするというのが無いんですよね。遠坂良一は強面で、どこに行っても、そこのトップと会える人間だったけれども、他はみんな内に籠ってしまうんだ。

今西：分裂した時の水戸の共産党は所感派が強かったのですか。

大池：50年分裂の時は、常東の農民組合の幹部達が所感派でした。

今西：山口武秀さんたちですね。

大池：あとは全部国際派。山口さんたちはその後辞めますが。

今西：除名されたのですね。

大池：山口武秀は、伊藤律が共産党に取り込んだんですよ。元々は労農党の代議士でした。共産党に媚びる必要はなかったのです。その後所感派と仲違いを

して除名され、共産党も辞めました。私も一時党籍を離れ、復帰したのは六全協（1955年）の前の年でした。そこで常東といつまでも喧嘩しては駄目だろうと言ったのです。それで私が山口ら幹部に会いに行きまして、共産党に戻れとは言わなかったけれども、和解しましょうと勧めました。

今西：大池さんは、社共同に対する評価は厳しいですね。青森の大沢久明さんなどの行動に対して。

大池：ハッキリです。1949年に35人の代議士を出しはしましたが。ですが、虚名だと思えます。今の民主党政権のようなものです。

今西：思想信条に関係なく集まっているわけですから、むちゃくちゃな合同ですよ。

大池：青森の流れは茨城まで来て、伊藤律などが一生懸命動いておりました。山口は、3000人全員入党する、と言ったんです。『アカハタ』などでも大々的に書いていましたが、ひどいハッキリです。常東にそんなに共産主義者やシンパがいるわけ無いんだから。

今西：農民運動の人達は本来、農地改革で集まった人達ですからね。土地をよこせと言って集まった人達ですから、共産主義者である必要は無いわけですよ。

大池：あれは一種の順法闘争ですよ。

今西：そうですね、農地委員会が小作の側をバックアップしてくれるわけですから。

大池：農民運動が農地改革をやったんだという主張はインチキなんですよ。

今西：それはそうですね、GHQがやらないとできないのですから。

大池：農地改革は全部GHQですよ。私は大学ノート2冊分調べたのですが、農地改革後は地主階級の支配など無いんです。在村地主は皆零落してしまっているのです。百姓などできないし、元々百姓などやったことは無いんだから。田畑を貸すといっても一町歩しか所有が許されませんでしたから幾らにもなりません。皆零落していました。不在地主は農地を全部なくしました。

今西：遠坂良一さんが、農地改革で地主が復活したというのは嘘だ、と早くか

ら主張していますね。遠坂さんというのは戦前からの活動家ですか。

大池：そうです。熊本の五高出身です。

今西：五高の出身ですか。

大池：農民運動で学業の方は挫折したようです。

今西：大池さんは国際派の活動をされていたのですか。

大池：ええ、やっていました。国際派であれ所感派であれ、共産党というものが社会的な信用をまったく失ってしまっていて、国際派の方も大した活動はできませんでした。水戸は200人全部国際派でした。古河の委員会も全部国際派でした。私は50年夏には常陸の河原子の海水浴場に宿を借りて、数人で合宿し、レーニンを勉強していました。

今西：その国際派は宮頭（宮本顕治）派ですか。

大池：宮頭派です。水戸から明治大学に行った竹内という考古学をやっていた学生が夏休みに戻って来ていて、何かやろうと私に言うのです。反戦闘争をやろう。でも闘争なんかできないのだから、ピラをまこうということになりました。私がガリ版でピラを作って、日立の工場に入って行って二人でまきました。そうしたら組合事務所に連行されて、そのまま警察に逮捕されました。1950年の7月です。拘置所に45日いました。水戸の拘置所というのは少年刑務所の一角なんです。そこに20日聞いて、その後浦和拘置所に移されて25日、合計で45日間いまして、起訴猶予で釈放されました。浦和では『資本論』を読んでいます。浦和拘置所には長野県の所感派の連中が20人ぐらい後から入って来ました。それも全員釈放されました。朝鮮戦争の戦況が思わしくなくなったので、裁判どころではないということなのか、まあこの辺にしておこうということなのか、よく分かりませんが。所管は朝霞の米第八軍でした。

今西：ピラは朝鮮戦争反対ですよ。よく軍事裁判になりませんでしたね。高橋さんはその当時どこに所属しておられたのですか。

高橋：私が共産党に入ったのは20歳ぐらいの時、入ってすぐオルグになって、少しの間茨城県南部地区委員会におりました。20歳ぐらいの人間が払底していましたから。その後、茨城県東部地区委員会に移り、何もやることが無く、常

東農民組合が小競り合いをしていましたから、鹿島地区に行かされて、2年ぐらいそこにいました。そのうちに六全協があり、六全協というのは要するに多すぎるオルグの人員整理ですから、私も辞めました。

今西：出世が早いというのは、戦争で人がいなくなっていたから、すぐに抜擢されるわけですね。

高橋：私は国際派解散後のオルグです。ただ私は、共産党の上部機関から金をもらったことはありませんでした。生活はひどく厳しかったですよ。そこで神之池基地反対闘争というのが起こるのです。鹿島の臨港工業地帯に哨戒艇の基地ができることになったからです。闘争支援で食料が集まって来まして、それで食べるようになったんですよ。五全協の武装闘争時代です。大池さんは新聞社を作ったり、奥さんの収入で浪人したり、優雅にやっていました。

今西：山口武秀さんの常東農民組合と茨城農民同盟は対立していなかったのですか。

高橋：対立はしていません。

大池：茨城農民同盟が常東に進出したように言っていますが、そうではなくて、常東が事実上活動を止めてしまっていたんです。山口さんはその後も税金闘争をやっていましたが。農民運動は農協が全部吸収していきました。常東解散後は鉾田町農協の組合長におさまりました。農民同盟は、松下清雄や下山田虎之介などが常東組織を離れて東茨城郡に来て作ったのです。旗上げはしてみたものの農民運動がやる仕事はもう無いのです。ふたり共結局、茨城町の町会議員になりました。

今西：下山田さんはまだお元気です。日本とヴェトナムとの友好運動をやられています。

高橋：私と同年輩の人間は皆、今でもリベラル・レフトで、昔の夢を追っているんです。

今西：ヴェトナムも変わってしまっているんですけどね。大池さんは、1952年の山口武秀さんの除名に対して反対の文書を書いておられますよね（「山口氏除名問題の再評価について」『奴隷の死』所収）。当時、共産党中央はやはり山

口武秀を除名しろという方針だったのですか。

大池：そうですね。

今西：常東農民運動に対する批判は、その頃すでに出ていたのですか。

大池：出ていたと答です。何しろ日農（日本農民組合）は、農地改革で地主支配はかえって強化されたというとんでもない主張でしたから。逐条的にはっきりとは覚えていませんが……。

今西：日農の再建大会で『誰が日農を分裂させたか』というパンフレットが出て共産党批判をするわけですが、日農分裂についてのことはご記憶にありませんか。

大池：多少覚えています。

今西：第6回日農大会（1953年）では、安東仁兵衛さんが「スパイだ」と強く攻撃されます。そこにはおられたのですか。

大池：はい、見ていました。

今西：常東農民組合と共産党との関係はあまり良くなかったのですよね。

大池：良くなかった。当時すでに中央は妥協的になっていまして、そこから派遣されてきた人間が、分解してしまっていた茨城の党を再建しろと言ってきました。私は当時浪人していて、そのようなはっきりしない状態は嫌だと断りました。派遣されてきた人間は、財政的に困っているから金を集めてくれとも言いました。金の方は集めました。1万5000円ほどでしたか、当時の金ではかなりの額だったと思います。彼は、君の力がなければ茨城の党、特に水戸の党は再建できない、と助けを求めてきました。その頃は、所感派も国際派も融合的な雰囲気でした。

今西：六全協の前は融合的でしたね。

大池：じゃあ水戸の共産党を再建しようかということで、当時、水戸市南郊の元台町の薪炭屋の離れに借家していたのですが、その前を旧水戸街道が走っておりまして、そこからただらと北へ1キロほど下ったところが、水戸市下市です。大洗行きの路面電車が走っている目抜き通りに面して、シンパの後家さんがやっている菓子屋があり、その並びの手頃な空き地を借りて小屋を建てま

した。下市細胞事務所といました。

高橋：形にはなっていませんでしたね。簡易宿泊所のような所になっていました。

大池：五全協で鹿島郡の農村や開拓地を半ば流浪していた高橋さんにとってはそうだったのでしょうか、一居住細胞の事務所でも、建物があって、そこに私がいるということで自然に人が集まってくる。茨城大学細胞の碁の名手が私に碁を教えにくる、といった接配です。茨大細胞のキャップをしていた生田目氏は「初めて上級からまともな人が来たと思った」と後に述懐しています。

その後、水戸市委員会として水戸の細胞を全部掘り起こして、同時に大工・左官・鳶の三職組合200名を引き連れて税務署に乗り込み、税金告知書を全部置いてきました。棒引きです。私には、市内の有力な商工業者や高給取りの中にカンパしてくれる人がかなりたくさんおりました。下市細胞、水戸市委員会、県常任委員会と再建していくのですが、こうした支援があって初めて可能だったのです。

今西：茨城県委員会の針谷武夫さんへの評価も厳しいですね。針谷さんというのは、法政大学を出て、戦前運動していましたが、転向して満鉄に入って、帰って来て50年代は茨城で軍事委員などやっておられた方ですよ。

大池：針谷というのは、国際派が優位な時は国際派にいて、国際派が解散するとすぐに主流派に移って、茨城に詳しいということで派遣されてきました。

今西：同じ県委員会の石上長寿さんなどに対しても、転向を隠していると厳しく批判されていますね。

大池：転向問題も追究しましたが、主な批判点は、南部地区に自分のフラッグを作って活動しているその方法そのものにありました。小沢一郎のようですよ。

今西：自分の部下を作りたがるわけですね。

5 ハンガリー事件以後

高橋：大池さんが中央委員会で除名になった後、いいだももが何かの商業誌に書いたんですが、いいだももの本質はそこに全部出ているように思いますね。

今西：1958年7月14日の『アカハタ』に大池さんの処分についての文書が出ていますね。

大池：それは第七回大会の冒頭です。『批評』という同人誌を1957年に出しまして、その第2号に「何をしてはいけないか—人間疎外をもたらす一切の制度の死滅への展望」（『奴隷の死』所収）というのを書きましたが、その内容が引かれています。

今西：1956年に、武井武夫さん（アカハタ国際部長）のハンガリー事件に関する記事（「悲劇の一週間」『アカハタ』1956年11月1日）に対する批判を書いておられますよね（「ハンガリー事件に関する『アカハタ』への投稿」『奴隷の死』所収）。

大池：『アカハタ』の編集部がこの文章を載せようということになったのですが、機関誌統制委員会が差し止めたんです。当時機関誌に対する統制が厳しくなっていました。その前に、統一戦線と称して茨城の共産党が社会党を応援して、自分は何もせずに選挙をやったことがあります。社会党県連の久保三郎委員長に直談判して、「共産党の支援は、これを拒まない」という声明を出させたのです。私はその時「統一戦線戦術について」という論文を書いて『前衛』に載せました。中央委員会で宮本顕治の下にいた人間たちが困ってしまって、自己批判しろと言ってきましたが、冗談じゃないと拒否しました。その時、関東地区代表者会議というのがありまして、おそらく準備していたのだと思うのですが、大勢が私を批判してきました。私もいちいち反論して一歩も引かなかった。茨城以外は全選挙区に党の候補を立てて、金も無いのに歯を食いしばって選挙運動をした。挙句にろくに票も取れずに全員落選というみじめな結果に終わった。私に対する攻撃は嫉妬です。その頃から私は睨まれていたんです。そこに『批評』など始めたわけですから。

今西：『批評』を始めたのは共産党を出てからですか。

大池：いや、まだいました。

今西：「吉田和夫」こと高橋さんも一緒にやられたわけですね。他にも伊藤元雄さんとか。

大池：伊藤元雄は名古屋大学の細胞の幹部でした。卒業後に上京して、篤志家の共産党員の援助で国電大崎駅近くに「勤労者学園」を作るということで、私を推薦したんです。文芸関係の講師を集めようということで、埴谷雄高や花田清輝、野間宏、佐々木基一のところなどを回って承諾してもらいました。作曲家の林光も講師を引き受けてくれました。大崎に校舎ができあがっていたのですが、経営方針で対立しまして、なぜ大池の言う通りにやらないのだと伊藤元雄がオーナーを殴ったんです。それで私も辞めて、その頃です、『批評』を出したのは。

今西：『批評』グループの頃は、どんな活動をしておられましたか。

大池：私が失職して困っているということで、茨大細胞キャップの救仁郷建が、自分の母親がやっている「社団法人社会福祉友の会」を手伝ってくれと言ってきまして、1年間手伝って社団法人格を取りました。『批評』の2号と3号を出したのはその時期です。3号を出した頃が、ちょうど除名される時期です。当時は、社会福祉友の会の西落合診療所に勤めながら、新宿居住細胞というのに所属していました。問題になった論文をこの細胞に提出したのですが、反対と言う人間はいなかったんです。インテリが多かったのでしょうか。それで、新宿地区委員会に論文を上申したんです。地区委員会はそれをそっくり中央に上げた。そして、中央委員会から、これは除名に値するのではないか、ということで除名処分の指令がまた細胞に降りてくるわけです。規約上、除名は細胞ですることになっているんです。

今西：ハンガリー事件に関わる大池さんの先駆的な批判は、共産党の方からすれば、解党主義、反党分子ということになるわけですね。

大池：そうです。東京に出てくる前に私は茨城県常任委員会の委員をやっています、青年部長と財政部長でした。51年にコミンフォルム声明で分派と規定され、コミンフォルムが所感派の武闘方針を支持したので、宮本国際派は直ちに解散しました。そこで私は、水戸に戻って新聞をやりたいと言ってきた遠坂良一を助けて『新しいばらきタイムス』という新聞を作り、それが軌道に乗ったので、社を辞めて浪人し、この間女房の月給で暮らして一女を設け、私は読書

三昧でした。その後、六全協に先立って水戸、次いで茨城県委員会の再建に乗り出したのです。ハンガリー事件の時には、茨城県の党再建は軌道に乗っていました。私は遠坂に話して、社会党県連副委員長で青年部長の高儀満威氏、労農党県連青年部長山県某氏と、財政部長兼青対部長だった私の3人でハンガリー事件をめぐって座談会をやりました。私は、ハンガリー事件に対するソ連の弾圧について抗議しました。でも、労農党も社会党もはっきりしたことを言わないので、びっくりしました。共産党の中も沈黙でした。これはもう駄目だと思って常任委員を辞任しまして、居住細胞を作ろうということで、広く同志を集めて1957年に「水戸第五細胞」を作ります。第五細胞では、自由に意見を言おうと『風』という機関誌を出します。50円くらいの有料で党員に頒布したのです。それが問題になりまして、東部地区委員会に呼び出されたのですが、茨城大学細胞の人達が10数人で傍聴に来て同調してくれました。救仁郷がキャップだったのですが、卒業する時に大学細胞を解散したんです。第五細胞も『風』も、文字通り台風の目になりました。その名誉は高橋さんに帰します。彼が言い出しっぺです。

私が新宿の西落合診療所に勤めていた時、1957年ですが、そこに、私の影響下にあった高知聰が訪ねて来ました。

今西：高知さんは後になって大池さんの批判を書いておられますよね。

大池：高知は、私の部屋に転がり込んで来て、一緒に住んでいて、勤め先も見つけてやったんです。そうしたら勤め先の金を持って逐電しちゃったんです。埴谷（雄高）のところに行ったに違いないと思って訊いたら、来たと言うんです。事情を説明して、私のところに戻って来るよう話してくれと埴谷さんに言ったのですが、あの人も変わった人だね。高知のパクリを悪いことだと思っていないんですよ。革命のためにブルジョアから金をとったんだから、という発想なんですね。

今西：では、その後の大池さんの歩みについてお聞かせください。

大池：マルクスのパリ・コミューンの検討をしまして、それ自体にいろいろ問題はありますが、『批評』においても中心テーマでした。高知聰も晩年までパリ・

コミュニンの研究をしていました。

今西：そうですね、高地さんの名著は『都市と蜂起』（オリジン出版センター、1983年）ですからね。黒田寛一さんの「弁証法研究会」とは、全国の研究会をやっておられますね。

大池：黒田寛一とは、コミュニンの問題はやっていないのです。あの人は哲学的な人ですから。黒田氏とは、高田馬場の「大都会」という喫茶店で黒田の弁証法研究会と『批評』の合同研究会をやりました。私は当時まだ依然として未来志向なんです。コミュニンに固執していて、それは一種の信仰と言ってもよいかも知れません。黒田氏は弁証法的・史的唯物論に固執してまして、世界は世界革命の過程にあり、ハンガリー事件はその過程での一つの躓きであって、それを批判する余り、世界革命を見失ってはならない、というような論旨でした。私達にはコミュニン論も現実認識も、主体性と個の問題も一緒くたに飛び込んで来ていますから、両者は到底かみ合いません。

『批評』時代の後、出版社の論争社に関わります。遠山景久が『批評』を読んでいたんですよ。以前『アカハタ』の編集長だった原田氏が薦めたんです。原田氏は神山（茂夫）派で、遠山は神山を支援していたんですよ。それで会ってみようということになって、遠山が私に葉書をくれたんです。そうして遠山がオーナーで論争社を作ったのです。左右の論争をやろう、ということで。私は2年間、論争社にいました。なぜ辞めたのかと言うと、季刊だった雑誌『論争』を月刊にすると言うわけです。月刊にするような趣旨の雑誌ではありませんから。月刊にしたら商業主義になってしまい、かえってますます赤字が累積しますので編集長はやりたくない、と言ってやめました。その後、日本ソノサービスセンターという産業教材の会社を9年間やりました。この会社は徳間康快やすよしさんに後を託しました。

今西：徳間書店の初代社長ですね。

大池：彼も私の会社に山っ気があって、引き受けてくれましたので、私は退きました。

今西：その後はどうされたのですか。

大池：平和相互銀行の仕事を手伝いまして、通信回線の自由化をやりました。

今西：戦争中の勉強が役に立ったのですね。

大池：1970年に電電公社が「公衆電気通信法一部改正法案」を作ったんです。そこで、小宮山英蔵さん（当時平和相互銀行社長）と、奥村綱雄さん（当時野村證券相談役）を押し立てて、経団連が動いて、『日本経済新聞』の月曜論壇「私の意見」に奥村さんの「通信回線の解放を論ず」というコラム3000字を載せたんです。続いて小宮山さんの、ナポレオン三世のパリ都市造りにおける共同溝網が今日も生きて、通信、上下水、電気、ガスのネットワークの根幹を成しているというコラムが日曜論壇に載ったのです。日経には太田哲夫という、『論争』の新人賞に入選した経済部のデスクが頑張ってくれて載ったんです。それで結局、改正法案は廃案になりました。

今西：話は少し変わりますが、いわゆる「昭和史論争」で、亀井勝一郎さんの側のデータを丸山眞男さんが提供したと言われていたのですが。

大池：『中央公論』編集長の粕谷一希が、丸山に作らせて亀井に持って行ったんです。私は、丸山眞男の影響は全くと言ってよいほど受けていません。それは良かったなあと思っています。『論争』に集まった連中もほとんどそうです。私は大学に行きませんでしたから当然なのかも知れませんが。

今西：旧制高校は今の大学以上のレベルですけどもね。

大池：ある同級生が、丸山を罵倒するとはひどいじゃないか、という手紙をくれたことがありますよ。

今西：その後、保守主義のグループを作ろうという動きがあったわけですか。

大池：田中清玄が、福田恆存だとか神奈川県教育委員会の鈴木重信、村松剛などに声をかけて集めたんです。契機になったのは1961年の、中央公論社長の嶋中鵬二の奥さんを右翼の青年が殺傷しようとして誤って女中さんを殺した事件（嶋中事件）でした。田中清玄のところで毎月2日に集まるうということで「二日会」と名付けました。私はそこで最年少でした。私はいつでも最年少なんです。

今西：最後の生き証人にもなれますね。

大池：ところが、田中清玄がピストルで撃たれたでしょう（1963年）。あの事件は、田中が東京会館から出てきたところを待っていた人間が8連発の銃を全部撃ったのです。全部急所を外れたんですね。1メートルぐらいの至近距離からだったのだけれども。それが契機で二日会も止めてしまいました。福田恆存さんもその後「三百人劇場」というのをやっていたけれども、財政的にはかなり厳しくて、晩年はあまり芳しくなかったようです。

今西：今日は、現代史の重要なお話をお聞きすることができました。どうもありがとうございました。